知床財団がお届けする 知床の自然情報誌SEEDS（シーズ）　公益財団法人 知床財団　発行日 2013年1月29日

SEEDS

No.217
2013 / 冬号

>>活動レポート

- 漁業者とヒグマの新たな境界線
- スライドレクチャー誕生しました

>>緊急レポート

「ストップえさやり」キャンペーンを実施しました

>>知床財団 用語辞典 第4回　会話編

>>知床財団 購買部 第３回 「メイドイン知床」の世界

>>スタッフは見た！第４回　羅臼沖のミステリーイカ

特集

オジロワシのどこがいい？

■写真　向かい合う大人のオジロワシ（右）と若いオジロワシ（左）。

知床財団
SHIRETOKO NATURE FOUNDATION

文吉湾の番屋の周りに電気柵のポールをたてるスタッフ

活動レポート

漁業者とヒグマの新たな境界線

| 文 - 遠嶋 伸宏　羅臼地区事業係長 |

原生の自然が残されている知床半島。その先端部には斜里町側に文吉湾、羅臼町側に赤岩と呼ばれる地区があります。

道路も電気もない両地区は昔から漁業資源が豊富で、漁師たちは番屋に住み込み、文吉湾では春から秋にかけて、さけます定置網漁業、赤岩では夏に昆布漁業を営んでいます。

昔から野生動物と人間はこの場所を共有してきました。しかし近年、ヒグマが番屋前に座り込んでいたり、作業スペースを横断したり、停泊中の無人漁船に乗りこむなど、人間の活動域に入り込んでしまい、両者の間に軋れきが生じています。

そこで、私たち知床財団は、両地区に人とヒグマの境界線となる電気柵を設置しました。両地区は漁業者自らが軋れきを回避し、自衛するモデル区としてスタートしたのです。

電気柵への進まない理解

電気柵は、野生動物から作物や家畜を守るために全国の農家でも活用されています。電線には微弱な電気が流れており、触れるとビリッとするので動物が嫌がり、寄り付かなくなるのです。高い効果が期待できる反面、張って終わりではなく、漏電対策のための草刈りや電圧測定など、日頃のメンテナンスが欠かせません。

導入にあたり、漁業者に電気柵の設置と有用性を説明させていただいたところ、賛同する意見もある一方、見たことも触ったこともない（触らなくて良いのですが）ものですから「そんなものでクマが来なくなるのか」「人間が感電しないのか」など、効果や使い方について不安だという意見もありました。

設置の苦悩

「人は自由に動きたいが、ヒグマには入ってきてほしくない。」これが漁業者の率直な気持ちです。しかし、実現のためには課題が山積みでした。何せ、漁業者ごとに浜の使い方や作業範囲がバラバラなため、電気柵の張り方も一様にはできませんでした。赤岩では潮の干満のため、柵の末端を波打ちぎわのどこまで延ばすか見極める必要がありました。文吉湾では、番屋の周りだけではなく港全体を囲いたいという漁業者の希望があり、大規模な設置が必要でした。設置をしたとしても、両地区とも海側までは塞ぐことができないため、ヒグマが泳いで侵入する可能性はないかなど、心配事は尽きませんでした。

試行を終えて

シーズンを終え漁業者に感想を聞いたところ、「今年はヒグマの出没が異常なまでに多くさすがに不安だったが、電気柵のおかげで作業場にヒグマが入り込むことがなく、無事に過ごせた。精神的に安心できた。」と嬉しい言葉をくださった方もいました。

しかし、良い事ばかりではありません。文吉湾では電気柵が張られていない海からヒグマが泳いで侵入し、港を徘徊した後、また泳いで帰るという事態が起こりました。さらに、ヒグマが山から電気柵沿いに降りてきて、またぐことが出来る高さからひょいと入ってくることもありました。また、赤岩では草が電気柵に触れ漏電したほか、電気柵の下をクマがくぐり抜ける事態も発生しました。

試みのその先

今回の設置で漁業者が電気柵の効果を実感できたことは、人とヒグマの軋れきを回避するための第一歩を踏み出したと言えます。

しかし、先述したように設置場所の問題や草刈りなど日々のメンテナンスに手間がかかるなど、運用上の課題はまだ残っています。

私たちは、漁業者の皆さんとともに課題を解決しながら引き続き電気柵の運用に取り組み、電気柵をより信頼性のあるものにしていきたいと考えています。そして、半島先端部だけでなく他の地域においても、電気柵が人とヒグマとの軋れきを回避するためのひとつの方法として活用されるよう、普及活動に努めていきたいと思います。

写真（左）：電気柵の周りは漏電しないよう草を刈っている
写真（右）：電気がしっかり流れているのか定期的なチェックが必要

波打ちぎわまで延びる赤岩の電気柵

電線の張り方を教わる赤岩の漁業者

文吉湾の斜面に現れたヒグマを追い払うスタッフ

遠嶋伸宏　羅臼地区事業係長

今年度から羅臼町役場より派遣された。役場時代より羅臼町内のヒグマ対策に積極的に関わってきた。羅臼育ち。

スライドレクチャー誕生しました

| 文 - 山野 秀尚　総務管理係 |

300人収容できる
ダイナビジョン館

私たちが知床で進めている活動は、知床の自然を「知り・守り・伝える」ことです。その中のひとつ、「伝える」ための活動として「スライドレクチャー」を新たに加えました。

私たちの活動拠点の一つである知床自然センターには、開館以来24年間上映し続けているダイナビジョン「四季・知床」という、約20分間の映像があります。知床を舞台に生き生きと躍動する動物たちや、時に荒々しく時に繊細な知床の風景、自然を愛し知床に生きる人々の営みが、移ろう季節の中で丁寧に描かれています。高さ12メートル、幅20メートルの大型スクリーンで見る映像は、迫力満点です。

しかし、20年以上前に撮影された映像であるがゆえに、これだけで「今の知床」はどうなっているのかを知ってもらうには限界がありました。そこでダイナビジョン上映後にスタッフが自分たちで撮りためた写真をスクリーンに映しながら、単なる観光旅行では気が付かない知床の魅力や課題、世界遺産としての価値を損なうことなく次世代に引き継いでいくための取り組みなど、「今の知床」について分かりやすくお伝えするプログラムを始めました。それが、スライドレクチャーです。

スライドレクチャーができるまで

スライドレクチャーは、スタッフが自分の言葉で知床の魅力を紹介することを大切にしています。誰かが作ったスライドをそのまま使うのではなく、自分が使うプログラムは自分で作ります。そのためシカ、クマなどトピックが同じであっても、作り手ごとにストーリーが違います。一つのプログラムを作り上げるまで、私は2週間以上もかかります。悩みに悩み抜いて完成させてもすぐお客様の前で披露できるわけではありません。まずはスタッフの前でお披露目し、スライドの流れ、内容、写真の質、話し方など、スタッフ同士が様々な角度から意見を出し合い、磨きをかけます。そして最終的にスライドレクチャーの総監督、岡本係長のOKをもらったものだけがお客様の前で披露されるのです。

ダイナビジョン館の巨大スクリーンの前でスライドレクチャーをする様子

ダイナビジョンで映っていた20年前のお花畑。今も変わらないのか？

知床では近年シカが増えていて、どこでも見られるという魅力もある。

スライドレクチャーってどんなもの？

「エゾシカの魅力と課題」

２０種類以上あるプログラムの中の１つを、簡単にご紹介します。

今はボランティアの方々とシカから木を守り・育てる活動を行っている。

犯人はエゾシカ。近年は樹皮をはいで木を枯らすことが問題になっている。

花はなくなり変わり果ててしまったお花畑。いったい何が起きたのか？

これまでの成果

これまで行ったスライドレクチャーは1150回以上、のべ1万3千人を超えるお客様にご覧いただきました。当初5種類ほどしかなかったプログラムは、今では20種類にまで増えました。これまで知床自然センターではカウンターをはさんでのお問合せ対応に追われ、じっくり時間を取ってレクチャーする機会は限られていました。しかし、スライドレクチャーをダイナビジョンとセットで常時実施できる体制にできたことで、インフォメーションとしての仕事の幅が広がりました。

ただ、知床自然センターには様々なお客様がいらっしゃいます。今後はお客様のニーズや興味にあわせて、知床自然センターだからこそ提供できるプログラムとしてさらに改良を重ね、小中学校への出前授業や全国各地へ発送する教材セットと同様、知床財団が行う「伝える」プログラムの大きな柱として育てていく予定です。

今後の「伝える」活動

世界遺産登録後の観光ラッシュは過ぎたとはいえ、知床国立公園の入り口にある知床自然センターは、年間12万人の方々にご利用いただいています。知床を訪れる方がまずはじめに足を運ぶ玄関口の施設として、自然の魅力を伝えることだけにとどまらず、原生の自然を残そうと奮闘した人々や今の私たちの活動を伝えること、そして知床の自然の魅力を自ら発見し、楽しんでいただくお手伝いをすることも私たちの大切な仕事の一つと考えています。

成果が目に見えづらい普及啓発活動ですが、今回取り組んだスライドレクチャーという新たな普及プログラムのように、今後も私たちは様々な方法で「伝える」活動に取り組んでいきたいと思っています。

■今回ご紹介した「知床岬地区の電気柵設置」と「スライドレクチャーの運営」は、アサヒビール株式会社様が全国で展開している「うまい！を明日へ！」プロジェクト第４弾、第５弾のご寄付により支えられています。

http://www.asahibeer.co.jp/superdry/umaasu/

山野秀尚　総務管理係

知床自然センターのインフォメーションを担う。大学ではシカの研究をしていたため、シカのことになるとつい熱が入ってしまう。

「ストップエサやり」キャンペーンを実施しました

文・寺山元　事務局 次長

今年、知床では例年にないほどヒグマの目撃が相次ぎました。斜里町では約1700件、羅臼町では約400件、合計2100件で過去最多でした。これまでに一番多かった年と比べても約2倍です。ヒグマと人との人身事故を防ぐため、目撃情報を受けると私たちは現場へ急行し、必要があればヒグマを追い払うなどして対応します。危険な場合には駆除することもあります。目撃情報がひっきりなしに寄せられた今年、スタッフは昼夜問わずヒグマ対応に奔走しました。

今年はヒグマを恐れない人の行動も目立ちました。距離5mから携帯電話のカメラでヒグマを撮影する人や、車からヒグマにエサを投げ与える人までいました。近年は平気で人前に出てくる人を恐れないヒグマも見られるようになりましたが、一方でヒグマに対して危機感がない人間も少なくありません。ヒグマと人の距離はどんどん縮まりつつあります。このような状況の中、限られた数のスタッフでヒグマとの人身事故を防ぐには、人の行動を変えてもらうよう働きかけることが、今すぐ必要だと考えました。

特に緊急性の高い課題は「エサやり」でした。エサやりは、人に近づく危険なヒグマを作り出す一番やってはいけない行為です。にもかかわらず行われてしまうのは、未だ多くの人にとってエサやりが野生動物とふれあうための方法としてごく当たり前な行為という認識があるからなのだと思います。そこで人の意識を変えてもらうため、駆除されたヒグマの写真と私たちのメッセージを込めたカードを作り、知床に訪れる人に配布することにしました。それが今回のキャンペーンです。

このキャンペーンをきっかけに、観光協会、行政、自治会などもエサやりをなくすための取り組みを始めようとしています。知床共通のメッセージとして「野生動物にエサをあげないで!」と発信し続ければ、やがて人の意識は変わり、ヒグマへのエサやりはなくなると信じています。私たちはこれからも、人とヒグマがうまくやっていくためにこのメッセージを発信し続けていきます。

車の窓からヒグマにパンを投げ与える観光客（2012年8月）。見にくいですが右に子グマがいます。クマ対策スタッフの車に搭載したドライブレコーダーで撮影しました。

右の写真が撮影された場所のすぐそばでスタッフが回収したゴミ（2012年8月）。ヒグマが頻繁に出入りする場所にもかかわらず食べかすや生ごみが捨てられていました。

ヒグマに数メートルの距離まで接近して写真撮影する人（2012年8月）。このような撮影目的の人々がヒグマを至近距離で取り囲む光景が連日のように見られました。

配布したメッセージカード。裏面には餌付いたクマがたどった運命の話を記載してある。

「ストップエサやり」キャンペーンについて

知床に来た観光客の1人1人に直接メッセージを届けたいとの思いから、メッセージカードを8月から10月末まで配布しました。

「エサをやらないで」という言葉だけではヒグマへのエサやりは止められないと考え、カードにはあえてショッキングな写真を使っています。何気ないエサやりが、多くの人を危険に陥れ、失われなくてもよかった命を奪うことになるというメッセージを、エサやりが原因で駆除されてしまったヒグマの写真に託したのです。

この写真を使ったカード12,000枚を、私たちの活動拠点である知床自然センターや羅臼ビジターセンターをはじめ、観光施設やホテル、観光船など29か所で掲示・配布。イベントでも積極的に活用し、テレビや新聞各社に取り上げられたほか、ツイッターなどインターネット上のメディアでも注目を集めました。

カードの配布にご協力ください。

キャンペーンカードの配布にご協力いただける方は下記までご連絡ください。なお、誠に勝手ながら50枚以上ご希望いただける方を優先させていただきます。詳細は、下記までお問い合わせください。

【お問合せ】099-4356 北海道斜里郡斜里町字岩宇別531番地
電話 0152-24-2114　FAX 0152-24-2115
公益財団法人 知床財団　情報係　まで